

学校図書館を活用した「読み」を鍛える拠点校事業 実践記録

研究主題

生きて働く読解力の育成

～キャリア発達を促す探究的な授業づくりを通して～

宿毛市立宿毛小学校

実践概要：

チーム宿毛小として全教職員が主体的・対話的に研究に参画する仕組みを確立した。本校は、年間を通しての学力向上計画を全教職員で共有し、短いスパンでPDCAサイクルを回しながら、加筆・修正を加え、全教職員で取り組んでいる。「何のために学ぶのか」という各教科等を学ぶ意義について児童と共有するために、単元の導入時には、ゴールと単元で付けたい力を児童とともに確認し、単元構想を児童と一緒に作成する。次時からは「何のために学ぶのか」という目的意識を途切れさせないように、授業の導入では必ず単元で付けたい力を確認し、言語活動のゴールイメージの共有や目的意識、相手意識の確認など、児童主体の授業づくりを行ってきた。また、新学習指導要領が目指す「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、資質・能力ベースの授業づくりを目指したためとまとめの研究を行ってきた。読解力の育成を目指し「読むこと」の領域に絞って研究授業を行うなど研究を重ねてきた。

キーワード：単元構想、読解力の育成、資質・能力ベースの授業づくり、児童の思考の足跡が残るノートづくり、言語活動の充実、図書館資料の活用、語彙力の育成

1. 研究仮説

- (1) 指導者が単元構成をしっかりと捉え、付けたい力を児童と共有しながら授業を行うことで、児童が単元の学習全体の見通しをもち、何をどのように学ぶのかを理解し、何ができるようになるのかといった明確な目的意識をもつことができ、学習意欲の向上や主体的な学びにつながるのではないか。
- (2) 課題解決に必要な情報を図書館資料や新聞等から収集、選択、比較・分類するなどの学習活動を行うことで、情報を基に自分の考えを構築する力が向上するのではないか。
- (3) 分かりやすく簡潔に書いたり、表現方法を工夫して説明したりするなどの活動を行うことで、伝える相手や条件を意識して自分の考えを明確に表現する力が向上するのではないか。
- (4) 自分の経験と結び付けて考えをまとめる、説明する、相手の考えと関連付けて話す、聞くなどの活動や交流を通して、さらに学びが深まるのではないか。

2. 実践方法

- (1) 国語科を軸とした授業づくりのプロセスの研究
 - ①公開授業・研究授業
 - ・国語科授業づくり講座による教材研究会及び授業研究会の開催（年間2セット）
 - ・全学年による研究授業（年間1学級1回以上）
 - ・講師招聘による授業研究（指導案検討から事後研修まで）
 - ②授業分析及び各種調査やアンケート分析に基づく授業改善
 - ③全国学力・学習状況調査結果の分析と指導の重点化
 - ④明確な単元構想を基にした授業づくり～児童とともにつくる単元構想図～

- ⑤資質・能力ベースの授業づくりに向けたためとまとめの研究
 - ⑥児童の思考の足跡が残るノートづくりの研究
- (2) 全学年で取り組む国語辞典を活用した語彙力の育成
 - ①帯タイムによる語彙力・読解力の育成
 - ②朝の読書タイムの充実（週1回は新聞を読む取組）
 - ③国語辞典の活用指導
 - (3) PDCAサイクルに基づいた学校図書館教育年間計画等の評価検証
 - ①他教科や総合的な学習の時間による図書館資料や新聞の活用
 - ②各種コンテストへの取組
 - (4) 学校図書館年間活動計画に基づいた読書活動の推進
 - ①読書活動に関するアンケートの結果分析及び課題解決に向けた取組の実施
 - ②学級ごとの目標冊数の提示や評価

3. 実践内容

- (1) 国語科を軸とした授業づくりのプロセスの研究
 - ①公開授業・研究授業
今年度は、国語科授業づくり講座による教材研究会及び授業研究会の開催を年間2セット行なった。授業づくり講座で学んだことは、全学年で取り組み、実施、検証、改善のサイクルを繰り返すことで、研究を積み上げた。教材研究や指導案の検討は各ブロックで行い、研究授業前は同学年で事前授業を行うなど常にチームで授業づくりに取り組んだ。研究授業後は各ブロックで研究協議の視点に沿ってKJ法で話し合い、全体で共有した



写真1：国語科授業づくり講座 教材研究会の様子

後、明日から全員で取り組んでいくことを決め、確認し合った。今年度、全員で取り組んでいくこととして決定したことは以下の点である。

- 明日の授業につながる家庭学習（予習）。自分の考えの理由や根拠を明確にする。
- 聞き手を育てる対話の強化。ペア学習の手引きを活用する。

このことは、学期末に検証を行い、学校全体で取組の進捗状況を確認しながら取り組んだ。

②授業分析及び各種調査やアンケート分析に基づく授業改善

児童のふり返り表と教師の授業力チェックシートに基づいた授業分析を行い、改善策を考えた。

改善策はどの学年も確実に実践し、再度検証することで、実施→検証→改善のサイクルを回した。依然として指導技術・児童理解の項目において授業者と参観者の数値の差があるが、課題が残る部分に関しては、次年度も取組を続けることにより改善を図ることを確認した。

③全国学力・学習状況調査結果及び高知県学力定着状況調査結果の分析と指導の重点化

全国学力・学習状況調査及び高知県学力定着状況調査は、全教員を各教科でチームに分け自校採点と結果分析を行った。

分析結果から、各学年で課題に対する具体的な取組を決めた。各学年の学力向上の手立ては、学期末には数値目標と照らし合わせて検証を行った。8月には、結果を基に国語は「読み」を鍛える授業づくり部会で、算数は学力向上部会で、再度分析を行い、各教科でのミニ研修を企画、立案、実施し、弱さの見られた問題をもう一度全教員で解くなどして課題を共有し、改善のための手立てを明確にし全学年で取り組んだ。

高知県学力定着状況調査は自校採点后、到達率90%以上のものを指導の強み、60%以下のものを指導の弱みとして、研究部会及び教科担当でその要因を分析した。その後、「読み」を鍛える授業づくり部会で、国語・算数・理科に共通して見られる本校の課題とその手立てを全体に提案し、3学期の授業づくりに生かした。さらに、各学年で課題の要因に対する具体的な取組を決め、年度末には取組ができたかどうかの検証を行うこととしている。

④明確な単元構想を基にした授業づくり～児童とともにつくる単元構想図～

単元の導入時には、ゴールイメージを明確にするとともに、単元全体の見通しをもたせるために、言語活動のモデルや学習の流れを提示し、付けたい力を確認してきた。これまで教師主導で単元構想図を提示していたが、昨年度3学期から



写真2：全教員で取り組む自校採点の様子



写真3：単元構想図作成の様子

は単元でどんな力を付けたいかを児童と一緒に考えることを始め、今年度からは全単元でより主体的・対話的で深い学びにつながるように、児童とともに単元構想図を作成した。

⑤資質・能力ベースの授業づくりに向けためあてとまとめの研究

昨年度7月30日の校内研修で西部教育事務所の間指導主事より「どう変える？新学習指導要領が目指す授業」として講話をしていただき、これまでの内容ベースの授業から、資質・能力の3本柱の育成に向けた能力ベースへの授業に向けて、今後どのような転換を図るべきかを学び、授業づくりの方向性を全教員で共有した。

講話を受け、「読み」を鍛える授業づくり部会より、2学期から国語科の授業のめあてとまとめの改善を図るために、「本時で育成したい資質・能力をまとめとし、まとめからめあてを考える」「めあてには言葉による見方・考え方を入れる」ことを提案し、めあては、「～【言葉による見方・考え方】をもとに（を通して、に基づいて等）～しよう」という形で作成することを確認した。また、9月5日の校内研修では各学年で国語科一単元分のめあてとまとめの作成を行った。まず単元のゴールを決めるため、新学習指導要領で指導事項を確認したうえで付けたい力を話し合い、1単位時間のめあてとまとめを考えた。各学年から提出された「めあてとまとめ」一覧表を確認し合い、めあてに言葉による見方・考え方が入っていない部分は再度修正していくなど、めあてとまとめの作成を通して、資質・能力ベースの授業づくりを進めた。今年度は、物語文と説明文の単元で、必ずめあてとまとめの作成を行なうことを確認し、取組を進めてきた。

⑥児童の思考の足跡が残るノートづくりの研究

「思考の足跡が残るノートづくり」を目指して、ノートづくりの研究に取り組んで3年目になる。年度当初に、各学年のモデルノートを示し、目指すノートとして児童と共有し合ったことで、児童自身もノートづくりへの意識が高まった。また、研究仮説に沿った視点でノートづくりに取り組んだ。今年度は、単元構想図と児童のノート、単元のゴールとなる成果物を持ち寄り、視点に沿ったノートづくりができていくかどうかを見合うこととした。その後、視点に沿ったノートづくりができたかどうかをブロックでふり返り、各学年で次回までに取り組む視点と単元を決めることで、協働的、継続的なノートづくりを進めてきた。



写真4：目指すノートを確認する校内研修の様子

(2) 全学年で取り組む国語辞典を活用した語彙力の育成

①帯タイムによる語彙力・読解力の育成

曜日毎に「帯タイム（15分）」で取り組む内容を決め、全校で統一して取り組んだ。語彙力の育成に向けて、月曜日は言語についての知識・理解・技能を習熟する「ことばのきまり」の学習、金曜日は読解力の育成に向け、読むことを中心とした活用問題に取り組んだ。

②朝の読書タイムの充実（週1回は新聞を読む取組）

学校図書館に設置している新聞の活用率が低かったため、各教室に新聞コーナーを設け、児童がすぐ新聞を手にする環境を整えたり、学年で決めた曜日の朝読書の時間に新聞を活用したりするなど、新聞を読む機会を増やしたり、新聞に慣れ親しむ環境を整えた。さらに、分からない言葉は辞書で意味を調べたり、気になる新聞記事のスピーチや投書を書く取組を行ったりした。

今年度の全国学力・学習状況調査の結果と児童質問紙から、テストの平均正答率と新聞を読む児童の割合を比較すると、「新聞をほぼ毎日読んでいる」と答えた児童の正答率が「ほとんど、または全く読まない」と答えた児童の正答率を大きく上回っており、学力との相関関係が大きいことが分かる。そのため、校内研修でも新聞の積極的な活用を確認し、家庭へも通信を通じて新聞を読むことを呼びかけたり、新聞を活用した問題を作成し、帯タイムで活用したりするなど、朝の読書タイム以外に新聞に慣れ親しむ機会を広げる取組も行った。

③国語辞典の活用指導

昨年度初めに「読みを鍛える授業づくりって？～語彙力を育成するために～」と題して教職員でワークショップを行い、子どもたちの語彙力を育成するための取組や授業づくりについて検討し、本指定事業に向けた研究の方向性を合わせた。そして、明日から取り組むこととして、「各学年に応じた国語辞典の活用による語彙力の育成」と決め、研究に着手した。

低学年は国語辞典の使い方指導を行い、中学年は国語辞典で調べる習慣を付けてきた。また、高学年は調べた言葉をスピーチやふり返りの中で活用した。低中学年は調べた言葉をファイリングして残す「言葉の貯金」を、高学年は「語彙手帳」の取組にも着手し、国語辞典の活用を広げた。



写真5：新聞に載っている言葉を辞書で調べる2年生

(3) PDC Aサイクルに基づいた学校図書館教育年間計画等の評価・検証

①他教科や総合的な学習の時間による図書館資料や新聞の活用

学校図書館教育年間計画に基づいて、他教科や総合的な学習の時間による図書館資料や新聞の活用を行い、学期末には年間計画に沿って検証と評価を行った。活用の更なる充実に向けて、計画は加筆修正を加え、次年度へつなげていく。

また、推進教諭は1～4年生は週に1時間、5、6年生は月に1時間、図書の授業の中でNDCや図書館の配架をはじめ、図鑑や百科事典の目次や索引の活用の仕方、新聞活用など学び方指導を行った。昨年度作成した情報活用能力育成年間指導計画に基づいた指導を行ってきたが、各学年で育成する情報活用能力が系統性のあるものとなるよう、学期末には加筆・修正を行った。図書の授業の中だけでは学び方の習熟は難しく、他教科や総合的な学習の時間の中で繰り返し行うことで身に付けることができると考え、指導した内容を担任に伝え、学級でも取り組んでいけるよう連携を図った。

②各種コンテストへの取組

新聞感想文コンクールに5・6年生が、学校新聞づくりコンクールに全学年が取り組んだ。学校新聞づくりコンクールに向けては、今年度は高知新聞社編集局の高本浩史さんを講師に招き、3・4年生が新聞づくりを学習した。また、校内研修で教職員を対象に「子どもを伸ばす新聞活用」として新聞づくり研修会を行った。新聞を活用する中で「読み」を鍛えることができるという点が本校の研究を進める上で大変有効であると考え、具体的な実践を通して活用する方法を学び、授業や研究の取組に生かした。

(4) 学校図書館年間活動計画に基づいた読書活動の推進

①読書活動に関するアンケートの結果分析及び課題解決に向けた取組の実施

平成29年度の学校評価アンケートにおける家庭での読書習慣に関する肯定的評価は、児童は83.3%、保護者は57.8%であった。家庭でも読書ができていると答えた児童の割合は高いが、保護者の肯定的評価は低く、家庭での読書の推進が課題だと捉え、昨年度から全校統一の生活日誌「すくすくノート」に読書の欄を設け、読んだ本の題名や読書時間を記入させ、家庭と連携した読書活動に取り組んだ。

②学級ごとの目標冊数の提示や評価

昨年度4月には学校図書館全体計画及び学校図書館年間活動計画を見直し、修正を行った。特に学校図書館年間活動計画のそれぞれの活動をより明確にし、読書活動や関連行事等を通して、子どもたち一人一人に読書の楽しさを味わわせ、読書意欲を高めるために図書館関係行事と司書教諭の活動、委員会活動に分けて見直した。また、学級担任に声かけをしてもらうなど連携を図るために、月の半ばと終わりに読書状況を各担任に知らせたり、読書冊数の多い児童を学期末にバスタードラーとして表彰したりするなど評価を行う機会を増やすことで、読書への興味・関心を高める取組を行った。

また、全学年で各教科等で図書館資料を活用した授業を実施することとし、学期末には年間計画に沿って検証と評価を行った。図書館資料の活用を計画している単元の導入前には、教室前の廊下などに関連図書のコーナーを設けるなどし、並行読書に取り組むことができるようにした。一人一冊は手にできるよう、本を購入したり、市内外の

公共図書館の貸し出しを活用したりするなど、図書館資料の充実を図ってきた。

単元を通して行った言語活動の成果物は、宿毛市立坂本図書館にも掲示してもらい地域のたくさんの方々にも見ていただく機会とすることで、授業での学びと実社会とのつながりを児童が実感できるよう取り組んだ。



写真6：昔話の紹介（地域の図書館と連携した取組）

4. 成果と課題

①全教職員が主体的・対話的に研究に参画する研究体制の構築

「読み」を鍛える授業づくり部会等を加えた5つの部会で2年間研究を進めてきた。研究目的や内容を細分化したことにより、部会の役割がより明確となった。また、少人数となったことで全員が意見を積極的に出し、話し合いが進められるようになった。今年度よりカリキュラムマネジメントチェックリストを教員対象に行っているが、9月実施の数値を見ると、「研究主題や研究内容を理解している。」「本校の研究組織で、自分の役割が分かっている。」「研究主題を意識して授業を行っている。」の項目に対し肯定的評価が100%であることから、教員一人一人が主体的に研究に参加することができていると考えられる。

②資質・能力の育成を目指した授業づくりの促進

授業力チェックシートなどを活用して、実践したことの検証を学期ごとに行い、分析から明らかになった課題に基づく改善策を全教職員で取り組むことでPDCAサイクルが回り、授業改善が促進された。昨年度1回目と今年度最後の結果を比較してみると、教材研究の項目は2.8ポイントから3.4ポイントへと大きく数値が上がった。特に設問1「系統性や児童生徒の実態を踏まえた単元や授業の構成」を問う項目においては、2.9ポイントから3.5ポイントと0.6ポイント数値が向上した。授業づくり講座で、「単元づくり＝学習指導要領に基づく教材の丁寧な分析＋子どもの実態＋教科書の有効活用」であると、単元づくりの在り方を問い直すことができた成果と考える。また、授業者・参観者ともに「学習指導要領に基づいた何ができるようになるか、そのために何をどのように学ぶのかを明確にした目標やめあての設定」を問う項目において、昨年度当初から0.3ポイント以上向上した。これは、資質・能力ベースのめあてとまとめの研究の成果である。また、児童のふり返り表から主体的な学びを問う項目において、肯定的評価は95%であることから、付けた力を見守るとともに考え、明確化することで学習に対してより意欲的に取り組む児童の姿が見られる。

しかし、「児童の反応やつぶやきを生かした授業展開」を問う項目においては、昨年度当初から0.2ポイント低い2.8ポイントであり、来年度からも教師の指導技術を高める取組を継続して行う必要がある。

③図書館資料や新聞の積極的な活用

児童のふり返り表の図書館資料等の活用を問う項目においては、昨年度当初に比べて0.2ポイント高くなった。また、カリキュラムマネジメントチェックリストにおいて図書館資料等を授業に活用できたかを問う項目の肯定的評価は93.8%と高い。このことから、図書館資料や新聞の積極的な活用が図られている。また、抵抗なく記事を読んで問題に取り組む児童の姿が見られるようになったことは、新聞を読む取組の成果である。

④「読み」を鍛える授業づくりに基づいた学力の向上

全国学力・学習状況調査の結果によると、国語科においては平成31年度の正答率は全国平均を11.2ポイント上回った。特に読む能力は95.4%の正答率で昨年を大きく上回った。2年間の研究の取組を通して読解力の育成が図られたと捉えている。一方で、書く能力においては、自分の考えを踏まえて文章を書く力に弱さが見られることから、考えの形成については課題が残る。そこで、授業においては、児童に課題に対しての自分なりの考えをもたせ、客観的に対象と言葉、言葉と言葉の関係を見つめ直すことで、言葉の意味・働き・使い方がどうであるかに着目させることを大切にしていくことで考えを形成する力を育成したい。また言語についての知識・理解・技能については58.6%と昨年度の正答率を下回っており、漢字の定着をはじめとする、語彙力の向上及び定着は課題が残るものと捉えている。来年度も継続して取組を行っていく。

	話す・聞く能力	書く能力	読む能力	言語についての知識・理解・技能
H30	86.3	67.1	63.1	73
H31	85.6	70.1	95.4	58.6

表1：全国学力・学習状況調査の結果

⑤読書活動の推進を目指した図書担当と学級担任の連携

今年度1学期の読書冊数の到達は86.7%、2学期は85.6%と昨年度の同時期と比較して4%上回っており、目標としている85%を超えることができた。短いスパンで児童の読書状況を学級担任に知らせることで、読書への声かけも多くなり、児童の読書量が増加した。また、今年度の校内研修の中に「読書習慣を身に付けるための手立て実践交流」を設けたことで、お互いに学び合うことができた。今年度の学校評価アンケートによると、「家庭でも読書ができている」と答えた児童は90%だったが、保護者は55.7%と大きなズレがある。家庭での読書習慣の定着に向け保護者と連携した取組をいかに行うか、今後検討していく必要がある。

【引用文献】

1) ぎょうせい『新教育課程を活かす能力ベースの授業づくり』2019年3月